子ども読書の日記念
子どもの読書活動推進フォーラム

四月二十三日は「子ども読書の日」です。そして、四月二十三日から五月十二日までの期間は「子どもの読書週間」となっています。

世界的にはユネスコが、シェイクスピアとセルバンテスの命日であるこの日を「世界・本と著作権の日」と宣言しています。

この「子ども読書の日」に、徳島県立総合教育センターで『子どもの読書活動推進フォーラム』が開かれました。

フォーラムは、徳島の子どもたちが自主的に読書に親しむことによって、豊かな心を育み、生涯にわたって自ら学ぶことができる読書活動のあり方について考えようとするものでした。

読み聞かせのボランティア団体の方、図書館、教育関係者が約百人集まり、基調報告、シンポジウムに熱心に耳を傾け、読書活動についてともに考えました。

・欧米、特にスペインでは、四月二十三日を「サン・ジョルディの日」として、本を送る習慣もあります。

フォーラムの最初に、教育委員会の吉本俊二指導主事の「読書の生活化プロジェクト‐１０００万冊読破‐」についての報告がありました。

「読書の生活化プロジェクト」は、これからの３年間で県内のすべての幼稚園、小学校、中学校、高校、障害児教育諸学校の児童・生徒、そして、教職員が一体となって一千万冊を読もうとする取り組みです。

幼稚園での読み聞かせ、学校での「朝の読書」、家庭での読書などで読んだ本をカウントしていきます。そして、三ヶ月ごとに集計し、読破の状況、各学校の特色ある取り組みなどを最終目標達成に向けて、教育委員会のホームページで紹介していきます。

そして、このプロジェクトの目的は、読書を子どもたちの生活習慣として定着させ、生活にリズムを作り、学力、そして、豊かな心を育てようとするものであると説明し、フォーラムの基調報告としました。

同時開催されたパネル展

続いて、徳島県子どもの読書活動推進協議会鴨川委員、吉原委員、漆原委員、中野委員の各パネラーによるシンポジウム「読書の喜びを子どもたちに」が行われました。

最初、各パネラーから本との出会いによって、未知の世界に足を踏み入れたかのように想像力をふくらませたり、感性を磨いてきた幼い頃の体験や、「読み聞かせ」を始めて、改めて読書、絵本の持つ力の大きさに気づかされたというエピソードが話されました。

そして、これまで取り組まれてきた子どもの読書活動については、それぞれの立場から多くの取組例やアドバイス、多くの人たちとの出会いについて語られました。

同時開催されたパネル展

読み聞かせのグループを作ることによってネットワークを広げ、そのネットワークの広がりが、子育てに悩む母親をも支えることにつながっていること。

本・読み聞かせとの出会いが家族・親子の結びつきを深める機会となること。

「朝の全校一斉読書」を始めて、一ヶ月、二ヶ月と次第に生徒の様子が変わり始め、三ヶ月後に学校が変わる。「朝の一斉読書」を楽しみ、他の活動においても前向きに取り組むようになったこと。

図書館での読み聞かせ会に親子二代にわたって通ってくる図書館利用者の方などとのつながりなどの実践報告がありました。

最後に、これから取り組んでいきたいことを発表されました。

家庭での「夜の十分間読書」を広めていきたい、「読み聞かせの活動を通じて本・読書のすばらしさを子どもたちに、親たちに直接伝えていきたい、市町村の子どもの読書活動を推進する計画を準備していきたいなど。

これらはすべて、県内で子どもの読書活動を推進するための方法に通じるものだと感じられました。

子どもたちにとって読書は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かにするなど、いわば人生をより深く生きるための力を身に付ける上で不可欠なものです。

家庭で、学校で、地域で子どもたちとともに読書活動をすすめていきましょう。

「徳島県子どもの読書活動推進計画」をご覧になりたい方は、徳島県のホームページに載せていますので、そちらをご覧ください。